

FDニュース

発行日 2011年 12月 22日

1.FD講演会報告

目次：

FD特別講演会報告	1
国際グッドプラクティス	2
レッスンシェア	4
H23年度前期授業アンケート集計結果について	5
H23年度FDに関する講座担当者へのアンケート集計結果について	6

7月7日の専任教職員会議の後に法政大学キャリアデザイン学部准教授の上西先生を招いて、「大学のキャリア教育はどのように行われるべきか—理念と実践的な取り組み—」と題するFD講演会が開催された。

(文責 長嶺宏作)



講演は、大学におけるキャリア教育の理念的な位置づけからはじまり、大学での学習内容と就職採用に求められる諸能力との溝が明らかにされた。つぎに法政大学でのキャリア教育の事例から、どのように大学での学ぶ意味を学生に理解させ、学びを中心とした大学時代の経験を活かして学生のキャリアへとつなげていくかを話された。

キャリア教育は一時間の授業で教えて完結するものではなく、大学教育全体のカリキュラムの中で学生のキャリア形成を支援していく観点の重要性が指摘された。特に、1年次から具体的に就職を意識させることは大学での学びの意味を希薄化させてしまう可能性があり、まずは当該学部での学びを通じた社会理解から、学生自身が学んだ内容を基盤に社会的な役割を認識(将来のキャリア像の形成)していくことが重要ではないかと提言された。

近年では企業の就職担当者などから「人間力」を重視するという発言がなされ、学生自身がそれを鵜呑みにし、社会的なコミュニケーション能力が問われると学生が思い込んでしまう。そのため、大学での学びや資格取得に向けた学びに対するモチベーションが高まらないという問題がある。そこで法政大学では、学部での学びを通してキャリアが開かれていくというモデルを示すことで、学生のキャリア形成に向けた意識を変えようと取り組んでいることが紹介された。

1時間の講演を終えて、フロアから活発な質問が出された。例えば、法政大学のカリキュラム選択においてガイドカウンセラーのような学生の履修を助言していくスタッフがいるのかという質問がだされた。それに対して、上西先生からは、法政大学では先輩学生を使って1年生の履修に向けた助言を行っていること。その際、ただ先輩を配置するだけでなく助言役の先輩には「楽な授業」「単位の取りやすい授業」といった情報を教えるのではなく、学生自身の興味関心に沿って、どのような科目を履修することが、希望する進路と合致するのかという観点から助言するように指導しているとのことであった。

また、学生自身の希望する企業と学生自身が現実的に就職できる企業とのギャップをどのように埋めているのかという質問に対しては、まずは、現実的な社会認識を得ることができるよう、企業で働くというのはどういうことなのかという理解から始めているということであった。例えば、就職数の多い企業の担当者呼んでゼミなどの場で相互交流することで理解を深めることにより、そもそも学生が希望する企業というのが憧れやイメージとしてある幻想を壊して、現実としてある就職先の企業の状況を伝える努力をしているとのことであった。

最後に、上西先生にキャリア教育の授業に参考になるような著書も紹介していただいたので、お時間があれば一読ください。

梅澤正『職業とは何か』講談社現代新書、2008年。

中沢孝夫『就活のまえに 良い仕事、良い職場とは?』ちくまプリマー新書、2009年。

石渡嶺司・大沢仁『就活のバカヤロー』光文社新書、2008年。

森岡孝二『就職とは何か—(まともな働き方)の条件』岩波新書(赤1338)、2011年。

沢田健太『大学キャリアセンターのぶっちゃけ話—知的現場主義の就職活動』ソフトバンク新書(177)、2011年。



2. 国際グッド・プラクティス

「国際グッドプラクティス」では、日本大学国際関係学部・短期大学部で行われている特色ある授業実践を紹介します。各授業においては、様々な取り組みがなされており、そうした実践を共有することで、それぞれの授業を振り返り、より豊かな授業を行うヒントになればと思います。

(インタビューア:長嶺宏作)

① 岡本博之教授:プレゼンテーションを主体としたゼミナール

今回は、岡本博之教授の「ゼミナール I」の授業にお邪魔した。岡本ゼミは学園祭ではディベートに参加するなど活発なゼミで知られている。そこでゼミの授業では、どのような活動を行っているのかを伺ってみた。

授業は、『マネジメント入門 ERPで学ぶビジネスプロセス』をテキストに、ERP(Enterprise Resource Planning)と呼ばれるITを使った統合的な業務サービスについて、学生が各章を分担して発表して、ディスカッションしながら、読み進めるものであった。ERPは、多くの企業で採用されている全社的システムで、注文から生産・発注までの一括した統合ソフトを活用することで、カスタマーのニーズをオンタイムで把握し、業務の効率化を進める経営手法である。

授業では各章を二人の学生が前半部分と後半部分に分担して発表し、それぞれ質疑応答をして内容の理解を深めて、最後にディスカッションをするという流れであった。

また、活発なディスカッションのための工夫としては、右の図にあるように発表を聞いている学生が、発表者を評価して、発表者が、それを次の授業までに振り返るというプロセスがある。このプロセスによって発表者と聞いている学生のモチベーションを高め、緊張感をうまく作り出していた。

演習 I Presentation Evaluation Sheet			
論題	発表者	年	月 日
発表内容について 1. たいへんよく理解できた 2. 理解できた 3. 普通 4. やや理解できない 5. ほとんど理解できない コメント			
発表態度について 1. たいへん良い 2. 良い 3. 普通 4. やや悪い 5. 悪い コメント			
Visual Aid について 1. たいへん良い 2. 良い 3. 普通 4. やや悪い 5. 悪い コメント			
質疑応答について 1. たいへん良い 2. 良い 3. 普通 4. やや悪い 5. 悪い コメント			
総合点 1. たいへん良い 2. 良い 3. 普通 4. やや悪い 5. 悪い コメント			
良い点			
悪い点(改善すべき点)			

長嶺:学生はパワーポイントでの発表でしたが、図や絵が豊富で良くできていましたね。何か特別な指導はされているのですか?

岡本:基本的には学生に任せていますが、授業の最初に英語のビジネス用の教材『How to make a winning presentation』という15分くらいのビデオを見せています。ゼミナールの教育方針として三本柱を設定していて、①英語の実力②ITの力をつける③プレゼンテーション力をつけることを目指しています。このビデオは英語ですので英語の能力の要請とプレゼンテーション力の育成というものを兼ねて、学生に訳させながら、指導しています。

長嶺:ゼミ中には随分ディスカッションが活発でしたね。

岡本:ゼミナールにおいては、必ず授業ごとに必ず一度は発言・質問するように求めています。それでも発言しない学生には私の方で指名して発言を求めると、授業を重ねるごとにディスカッションが活発になっていきました。

長嶺:ゼミナールのトピックが実践的で議論しやすいように感じましたが、その点は意識されているのですか?

岡本:はい、意識しています。私自身、国際企業に勤務していたという経験もあるのですが、学生はアルバイトをしていますので、そうした個別的な経験から一般的な事例へと授業の中で取り上げるようにしています。

長嶺:最後にゼミナールでは、イベントが多く企画されていましたが、その趣旨はどういったところにあるのですか?

岡本:まず、ゼミナールの募集の時点で、イベントが多くあることは了解してもらっています。その狙いはリーダーシップや企画力の養成にあります。ピーター・ドラッカーは「リーダーシップは生まれつきのものではなく、育てられるものである」と述べています。そこでゼミナールは、各イベントの責任者は毎回違う学生に任せて、企画・立案や業者との交渉を行わせるようにしています。特にゼミナールにおいて3年生の夏休みに企画されているNY研修は、ゼミナールの集大成の一つです。NY研修では英語によるインタビューやディスカッションを現地の企業や大学を訪問して行っています。この活動は、学生の英語学習の動機づけとなっています。具体的な目的を持つことで、実用的な英語の能力が付き、学習への動機づけにもなっていると考えています。

長嶺:今日は、ありがとうございました。



② 小代有希子教授：ノートを使った双方向授業

今年度は毎学期必修科目を3つ担当している。興味あることを深く自主的に勉強できるゼミなどと異なり、必修科目は、学生にとって否応なく取らされているものという消極

観がぬぐえない。それを克服すべく、抱える学生の総数は増えても、従来通りの「3つの教育方針」は続けている。1つ目は、学生にやらねば落第という危機感を持たせる、という姿勢。2つ目は、授業毎に学生の理解度を確認する「リアクション・ノート」の使用。3つ目は、教室での留学生との対話促進、ということである。

1つめの「危機感作り」というのは、要するに「適当にやっても楽勝」と絶対に学生に思わせないよう、課題を多く課すことである。レポートや試験は、必ず2週間以内に厳しく採点・返却。常に「落第」の恐怖と隣り合わせのような緊張感を作り出しておく。学生は教師の手抜きを本当に簡単に見破る。教師がしっかりチェックしていることを知らせることが大切だ。

2つめの「リアクション・ノート」というのは、学期はじめに購買部で指定ノートを買わせ、授業毎に講義で扱った事項に関する分析、考察などをそのノートに書かせ提出させ、コメントをつけて次回の授業時に返却するもので、これが出席記録にもなる。こちらが当然と思っていることが彼らの常識でないことがわかれば、教え方を調整できる。このノートには、学生各自の1学期間の思考過程が記録されるので、パラパラとめくるだけで、その学生が身をいれて授業を聞いているかどうか、かなり良くわかる。大人しい学生が、私のコメントに反論を試みることもあるし、洞察の深さに舌を巻くコメントもある。味のある感想を書く学生が、試験の出来は悪かったり、その逆もあったりと、学生たちの個性が把握できる。私は1984年から2006年まで日本に暮らしていなかったもので、彼らの育った子供時代を知らない。なので今の彼らの世界観からそれを学ぶ。「欧米人かっこいいのであこがれる」「私の戦争観とは・・・」「OXという

国が大嫌い」などの感想は、自分自身の研究データにもなる。

3つめの「留学生との対話を促進する授業」というのは、ここのキャンパスの特性を活かす試みだ。中国・韓国の留学生で希望する人に、日本の植民地統治、戦争などを、母国の学校ではどう教えるか、祖父母などはどう語っているかなど、説明してもらう。彼らは実に冷静に話しをしてくれ、日本人学生も興味深く聞いている。今学期は、ISEPでアメリカからやってきている留学生が多いので、私の英語の授業を取っている学生を別の授業に動員して、アメリカ社会におけるエスニック・アイデンティティについて、話しをしてもらっている。日本人は実はアメリカのことをほとんど知らず、「人種差別されるってどんな気分ですか」といった恐ろしく生々しい(無神経な)問いが集中する。これがアメリカ人学生には逆カルチャーショックで、憤慨・失望したりするが、しばらくすると、もっとアメリカについて説明したいなどと言い出す。日本人と留学生両方のこのような対話は、双方にとって貴重な体験になっているはずだ。

学生たちは概して、こういう試みを面白いという。最大の問題は、教師の側の負担が非常に大きいということだ。学生のリアクション・ノートに目を通して適切なコメントをつけて返却することは、担当する学生数が増えるほど困難になってくる。留学生を教室に呼ぶのはいいが、アメリカ人学生の場合、双方向通訳・翻訳をこなさねばならない。400人以上もの学生を抱え、授業から授業へ飛び回っていたら、まもなくこういった教育方針も放棄しなければならなくなるか、というのが目下最大の懸念だ。1講義あたりの学生数は最大50名、学期あたり担当コマ数は現在の半分・・・という夢がこのキャンパスで叶ったら本当にうれしい。

(小代有希子)

③ 太田尚子教授：対話を重視した基礎力の養成



短期大学部食物栄養学科では栄養士を養成することを主目的としており、その資格を活かし社会貢献できる学生を育てています。その基礎領域の一つとして「食品学」は位置づけられ、「食品化学」が基盤となっています。しかし、昨今の子供たちは

は理科離れが進んでおり、それに対処する必要があります。

本校に入学してくる学生のうち、高等学校(普通科)の場合に「化学」を学修している人は予想以上に少なく、逆に農業高校を卒業している人のほうが食品化学をより多く学修してきている実態があり、個人差がかなり大きくあります。

そこで私は常に学生との対話をしながら解説をするように努めています。教科書にどんなことが書いてあるか目を通した後、板書し、教室を巡回しますが、そのときに学生からの質問

を個別に受け付けています。その後、練習問題を出し、何名かの学生を指名し、黒板を使って解答してもらいます。その解答を見ながら、正解の場合はよりよい答え方を、逆に不正解の場合はその修正を全員を対象として行います。更に、家庭での課題(例えば英単語カードならぬアミノ酸カードの作成を宿題とするなど)を出し、回収、小テスト等を実施しています。このように一見、受験勉強のような授業になっていますが、食品学という基礎科目を学問として理解していくためには地道な努力の積み重ねが必須であることを体得してもらっています。

健康に関する関心の高まりが著しい現在、栄養士には食の専門家として周囲の人の疑問に正しく応えていく能力が強く期待されています。それに見合う実力を身につけてもらえるよう日々精一杯取り組んでいます。

(太田尚子)

3. レッスンシェア：

キャリアデザインのデザイン

「レッスンシェア」では、学部と短大に共通する授業や課題を特集して、各教員の取り組みを紹介します。第2回は「キャリア・デザイン」に焦点をあてました。本年度から国際総合政策学科と国際教養学科で「キャリアデザイン」が行われています。この授業を通して見えてくる学生像や各教員の工夫などを紹介していきたいと思っています。「キャリアデザイン」を受講する学生のキャリア像についてと「キャリアデザイン」の後半で展開される業界研究についてです。

(文責：長嶺宏作)

① 国際関係学部生のキャリア像

「キャリアデザイン」の授業において、将来設計を問うワークがあり、担当教員は学生に現在の将来像について聞く機会があった。その結果、国際関係学部生のキャリア像には興味深い特徴がみられた。数クラスの教員のデータであるために全クラスが同じ傾向にあるのかは断言ができないが、概ね同じ傾向だと推測される。

学生の将来像は大きく分けて①旅行業界・キャビンアテンダントなど②教員③未定④専業主婦の4つに集中した。もちろん、これ以外にも通訳、アパレル、金融などの業界に興味を持つ学生もいた。しかし、注目するのは、専業主婦という答えである。あるクラスでは女子学生の13人中9人が、将来、大学卒業して3年ぐらい働いたら、結婚して専業主婦になりたいと答えている。また、筆者が担当するクラスにおいても、男子学生も含めてほとんどの学生は将来、結婚して、子どもを持つという家庭像を描いている。

こうした若者の家庭への回帰志向はメディアなどでも指摘されることである。結婚して、子どもを持ち、将来の幸せな家族を夢みるというのも一つの生き方であり、社会的にも重要な意味を持つ。しかし一方で、現実的には、そうした選択がしにくくなっている社会・経済構造がある。我々は多様な生き方の選択ということを意識して教える必要があるのかもしれない。

専業主婦を成立させるためには、男性のシングルインカムによって家計を支える必要があり、そうした所得を持つ結婚適齢期にある男性は多くはない。このように見ると就職という場面だけでなく、生き方においても学生の理想と現実の間にはギャップがあると考えられる。

親世代や企業の人事担当者との求めるものと学生の希望との間のギャップは、若者の生きづらさに拍車をかけており、キャリアデザインでは、その現実に対してどのように向き合うのかも教える必要がある。

② 業界研究の取組

「キャリアデザイン」のシラバスでは、第6回、第7回において業界研究があり、その他にも学外講師を招いた講演会を通して就職先としての様々な業界について学習している。しかし、業界研究といっても、その取り上げ方などが様々であるため、二つの工夫を紹介したい。

一つは、各自個別に興味ある業界を調べさせて、それを発表されるという方式である。個別に調べることで、業界への興味が湧き、それをクラスの前で発表することで、その情報を共有できる。そして、簡単な業界のレポートを書かせて、それをファイルにして、業界ごとの特徴が書かれた簡易の就職案内を作るというものである。

もう一つは、グループに分けて特定の業界を調査する方法である。3人一組のグループに分けて、一人はプレゼンをするプレゼンター、一人は文献調査を行うリサーチャー、最後の一人は特定の業界に働く人にインタビューをするインタビュアーである。この調査の目的は、単純に業界研究だけではなく、実際に働いている人から



職場での楽しさや、その人の人生観などをインタビュアーに聞いてもらい、将来設計に役立てることである。また、電話などでのアポイントなど企業へのアクセス方法を理解させることも良い社会勉強になると意図されていた。

しかし、業界研究において、就職というものを、どこまで意識させて行うかで、教員側からの戸惑いの声も聞かれた。特に、2年次以降の大学での学習と就職ガイダンスとの関係の中で、キャリア形成の体系的な指導をどのように行うか、教員の間でコンセンサスを得る必要があるだろう。

4.H23年度前期授業アンケートの集計結果について

① アンケートの集計結果

表1 国際関係学部 科目区別平均値

	平均値	中央値	標準偏差
1. 教員は学生の理解度や反応に配慮して授業をした。	4.15	4	0.86
2. 授業に対する教員の熱意が感じられた。	4.27	4	0.8
3. 教員の声、態度、言葉遣いが適切であった。	4.25	4	0.84
4. 学生から質問や相談があった場合に教員は適切に対応した。	4.23	4	0.81
5. 各授業ごとの内容量は適切であった。	4.17	4	0.83
6. 授業内容は十分に満足できるものであった。	4.12	4	0.89
7. 授業内容はシラバスに示された目的や方法に沿って行なわれた。	4.17	4	0.79
8. 教員は学生の意欲を高めるような工夫を行っていた。	4.02	4	0.94
9. 成績評価の方法が具体的に説明されていた。	4.14	4	0.85
10. 教員は授業の開始・終了の時間を守った。	4.27	4	0.81
11. 私語や途中入退出が少なく、授業に集中できる環境であった。	4.09	4	0.95

表2 大学院国際関係研究科 科目区別平均値

	平均値	中央値	標準偏差
1. 教員は学生の理解度や反応に配慮して授業をした。	4.9	5	0.4
2. 授業に対する教員の熱意が感じられた。	4.9	5	0.3
3. 教員の声、態度、言葉遣いが適切であった。	5	5	0
4. 学生から質問や相談があった場合に教員は適切に対応した。	4.87	5	0.34
5. 各授業ごとの内容量は適切であった。	4.87	5	0.34
6. 授業内容は十分に満足できるものであった。	4.8	5	0.4
7. 授業内容はシラバスに示された目的や方法に沿って行なわれた。	4.9	5	0.3
8. 教員は学生の意欲を高めるような工夫を行っていた。	4.7	5	0.53
9. 成績評価の方法が具体的に説明されていた。	4.87	5	0.43
10. 教員は授業の開始・終了の時間を守った。	4.9	5	0.3
11. 私語や途中入退出が少なく、授業に集中できる環境であった。	4.9	5	0.3

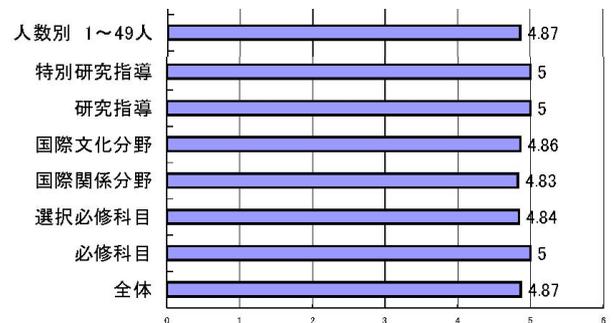
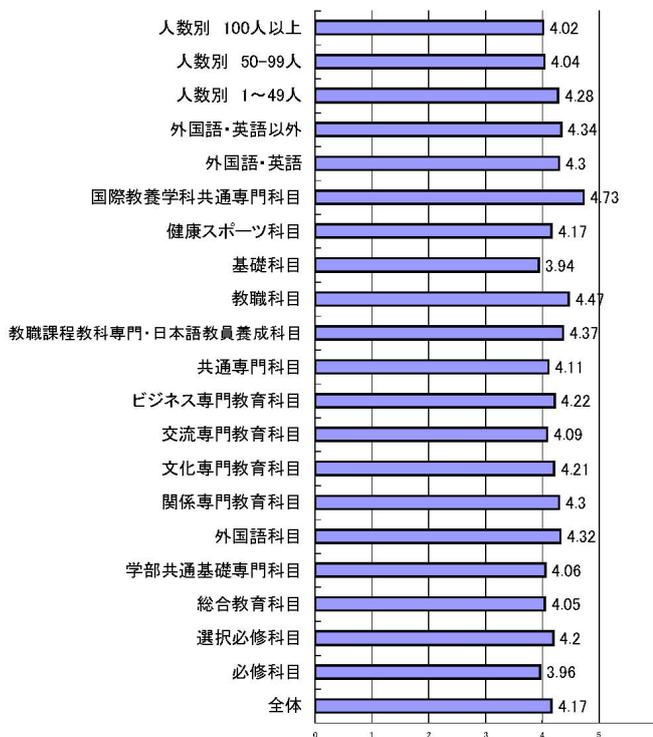
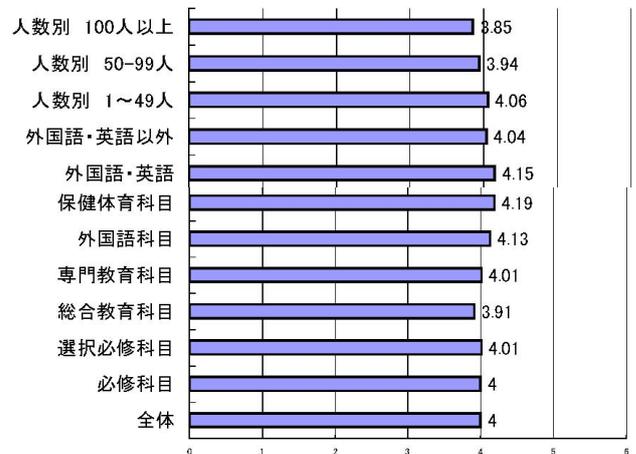


表3 短期大学部 科目区別平均値

	平均値	中央値	標準偏差
1. 教員は学生の理解度や反応に配慮して授業をした。	3.97	4	0.86
2. 授業に対する教員の熱意が感じられた。	4.13	4	0.77
3. 教員の声、態度、言葉遣いが適切であった。	4.12	4	0.84
4. 学生から質問や相談があった場合に教員は適切に対応した。	4.11	4	0.81
5. 各授業ごとの内容量は適切であった。	3.97	4	0.83
6. 授業内容は十分に満足できるものであった。	3.95	4	0.88
7. 授業内容はシラバスに示された目的や方法に沿って行なわれた。	3.99	4	0.77
8. 教員は学生の意欲を高めるような工夫を行っていた。	3.81	4	0.91
9. 成績評価の方法が具体的に説明されていた。	3.95	4	0.84
10. 教員は授業の開始・終了の時間を守った。	4.1	4	0.82
11. 私語や途中入退出が少なく、授業に集中できる環境であった。	3.94	4	0.94



② H23年度前期授業アンケートの結果を受けて

1. アンケート実施方法改変について

具体的な授業の改善はアンケートの記述式の部分を参考にすることが多いことから、FD委員会ではこれまでのアンケートより記述式を増やすことになりました。いろいろと検討した結果なのですが、アンケート用紙を2枚配布、回収、ということになり、先生方にはお手数をお掛けいたしました。ご協力本当にありがとうございました。ぜひ趣旨をご理解いただき、**数値化したものだけではわからない学生の声をくみあげていただき、授業改善に役立てるべき点があれば、ご活用いただきたい**と思います。

また、アンケート項目につきましても、内容を整理しました。そして、これまでの集計結果だと、自分の学部の中での相対的な位置がわかりにくい、ということから平均値、中央値、標準偏差を算出し、数値の読み方と共にご返却いたしました。

今後、実施方法につきましては、来年度に向け更に検討を加えてまいります。ご協力のほど、よろしく願いいたします。

2. アンケート集計結果について

項目別では、1～11について、国際関係学部ではすべて4.0以上でまずまずといったところですが、教員の「熱意」は認められているものの、「学生の意欲を高める工夫」と「私語や途中入退出」など授業環境の点は評価が低い

結果となりました。「学生の理解度を配慮せず、教員の一方的な授業になりがち」と学生は感じているのでしょうか。教員は「やる気のない学生をやる気にさせる工夫が求められている」ということとなりますが、学生の授業態度も問題です。厳しくすべきところは厳しくする、毅然とした態度をお願いしたいと思います。

また、科目区分別では、大人数、必修科目の評価が下がるのは例年の傾向ですが、初年度教育の重要性が強調されている昨今、基礎科目の評価が若干低めなのが気になります。どのような理由によるものか、今後、検討していきたいと思います。

短大の項目別では、国際関係学部と同じ傾向を示しています。ただ、科目区分別では総合教育科目の評価が若干低い状況が以前から続いています。この点も今後の検討課題です。

大学院については、少人数でもあり、高評価となっております。ただ、専門性が高い大学院が、学部と同じアンケート項目でよいのか、ということも当然議論する必要があると考えます。

以上の結果について、今後FD委員会で検討し、ワークショップの開催や学務委員会へのお願いなど、授業改善のために出来ることから取り組んでいく所存です。

(文責:安元隆子)

5. FDに関する講座担当者アンケート集計結果について

① FDに関する講座担当者アンケート集計結果

回収総数 職種別:1 専任38(40%) 2 非常勤54(57%) 3 無回答3(3%)

所属別:1 国際関係学部70(74%) 2 短大商経10(11%) 3 短大食栄10(11%)

Q1 平成22年度の授業アンケート結果は、全体的に予想された結果と比較していかがでしたか?

1 予想通り(11%) 2 ほぼ予想通り(72%) 3 予想より低い(6%) 4 行わなかった(7%)

Q2 授業アンケート結果をふまえてどのような授業改善をなさいましたか? 主なもの(3つ以内)を選んでください。

1 わかりやすさ(43) 2 興味深さ(25) 3 声、話し方(14) 4 理解度チェック(31) 5 教材方法の工夫(29)
6 板書(13) 7 視聴覚教材利用(10) 8 時間厳守(4) 9 シラバス順守(9) 10 親切な対応(10)

Q3:授業アンケートについてどのようにお考えですか?

① 実施時期について

1 現行通り各期末(85%) 2 各期の中間(5%) 3 各期の中間と期末(2%) 4 その他(4%)

② 実施科目について

1 現行通り全ての科目(60%) 2 同名科目は1クラスのみ(4%) 3 1教員につき1講座1演習(9%)
4 講義科目のみ(9%) 5 少人数科目は実施せず(8%)

③ 実施方法について

1 現行通り教員が回収する(68%) 2 教員以外が回収する(15%) 3 Webで回答する(15%) 4 その他(1%)

④ アンケート項目について

1 現行通り(80%) 2 項目の削除(8%) 3 項目の追加(1%)

⑤ 結果公表について

1 現行通り科目区分ごと(76%) 2 科目ごと(9%) 3 教員ごと(11%) 4 その他(2%)

⑥ 学生アンケート結果に対する教員からの改善策や意見を学生にフィードバックする方法

1 Black Boardに掲載(42%) 2 授業時間に伝える(50%) 3 研究室前に掲示(4%) 4 その他(6%)

Q4 これまで授業改善のために実施してきたことがあれば、主なもの(3つ以内)を選んでください。

1 授業アンケートに基づく改善(66) 2 アンケート以外の学生の意見を参考(43)
3 他の教員アドバイスを参考(35) 4 授業をビデオ撮影(3) 5 他の教員の授業を参観(6)
6 学会・研究会で情報収集(20) 7 報告書や研究所を参考(16) 8 その他(7)

Q5 今後の授業改善のために実施したいことがあれば、主なもの(3つ以内)を選んでください。

- 1 授業意欲を高める(56) 2 社会と連携、現場感覚導入(20) 3 対話を重視(34)
4 学生の反応や理解度重視(57) 5 獲得能力や業価値の説明(15) 6 アンケート結果のフィードバック(7)
7 情報技術の活用・習得(6) 8 学生のノートパソコンの活用(2) 9 同名科目担当教員との連携(10)
10 プレゼン力の向上(11)

Q6 「大学設置基準」「大学院設置基準」でFDが義務化されているのをご存知ですか？

- 1 意味がわからない(3%) 2 知らなかった(24%) 3 知っていた(72%)

Q7 FD活動に関心がありますか？

- 1 全くない(3%) 2 あまりない(11%) 3 どちらでもない(35%) 4 ある(42%) 5 とてもある(6%)

Q8 本学部では今後どのようなFD活動に取り組むべきだと思いますか？実施した方がよいと思われる事項をすべて選んでください。

- 1 アンケート結果の更なる開示(13) 2 アンケートに基づく授業改善の義務化・制度化(7)
3 授業方法改善のためのワークショップ(34) 4 教員相互の授業参観研究の拡大(12)
5 アンケート以外の学生視点の導入(44) 6 授業時間数や担当授業科目の再検討(24)
7 教育面の業績評価(20) 8 教育実績記録を整理、活用する仕組み(6) 9 成績評価や学生評価の検討会(3)
10 教育方法改善への人的援助・物的援助(28) 11 多様化する学生への教育指導支援(32)
12 卒業時の満足度カリキュラムアンケート(14) 13 FD取り組み事例集の作成と公表(7)
14 大学間の協同体制(4) 15 その他(17)

②FDに関する講座担当者アンケート集計結果を受けて

7月末に実施いたしました、FDに関する講座担当者アンケートは、多忙な時期でしたので、回答して下さった方が少なかったのが残念でした。結果と考察は以下の通りです。

学生授業アンケートでは「傾向」を把握することが大切だと考えます。「自分でもよくないと思い、学生もよくないと評価した」というのと、「自分は良いと思っていたのに、相手の評価はよくなかった」とを比べれば、後者の方が問題です。「予想通りの結果」が多数だったのは、授業について、学生の視点を共有していることになり、よい傾向だと思います。そして、学生アンケート結果から読み取れることは、学生から求められる「わかりやすく、意欲の増す興味深い授業」を意識し、改善に励まれている先生たちの姿でした。

アンケート実施方法では、ほぼ従来通りのやり方を支持されていることがわかります。授業改善についての学生へのフィードバック方法については、web上に掲載、という答もほぼ半数あり、今後このような方法についても検討していきたいと思えます。

授業改善の方法としては、学生アンケートも有効な手段となっていて、実施意義があることが確認されました。それ以外には、学生や他教員の意見を参考にされている先生が多く、授業改善のための情報や意見交換の場を設ける必要も感じました。授業改善のために実施したいこととして、「授業意欲を高める」「学生の反応や理解度重視」を挙げている先生が多く、学生アンケートで導き出された学生の要求と合致しています。学生の声に耳を傾けて下さっている先生方のお姿が映し出されました。

FDへの関心は、半数の方がいる、と答えています。今後、もう少し関心を高めてもらえるよう、先生方にとって役立つ、有意義な活動を行っていかねばならないと思えます。そのためにも、Q8でのご回答は参考になります。先にも書きましたように、「授業方法改

善のためのワークショップ」や「学生視点の導入」をFD委員会主導の形で出来ないか、検討したいと思います。また、「多様化する学生への教育指導支援」は急いで取り組むべく事項です。FDの講演会でまずとりあげられないかと考えています。「時間数、担当科目の検討」や「教育方法改善のための人的、物的援助」は学務委員会などと連携しないと実現しない事項です。今後は委員会同士の横のつながりも強め、検討していけたらと思います。

自由記述欄にも様々なご意見をいただきました。学生アンケートの実施時期、回収方法、学科別アンケート、教室設備アンケートの実施、教員評価と連結すべき、などのご提案のほか、アンケート自体の効力への疑問なども寄せられましたが、学生アンケートを参考になさっている先生も多いことが本アンケートからもわかったため、FD委員会としては、今後もより有意義なアンケートの実施を模索していきたいと考えます。

また、同名科目担当教員との連携の必要性や、教員に社会人をもっと取り込むべき、といったご提案もありました。教員の問題だけでなく、学生の受講態度、モチベーションの低さを指摘される先生も多くいらっしゃいました。そして、そのような悪しき学生たちがアンケートで教員を誹謗する例もある、とのご指摘もあり、問題は山積みです。教員と学生とで共に協力して授業をよりよいものにしていく、という意識を学生に徹底する必要があるようです。

今後、いただいたご意見をFD委員会で慎重に検討していきたいと思えます。ご協力くださった先生方、貴重なご意見を本当にありがとうございました。

(文責:安元隆子)

FD委員会

発行者: 日本大学国際関係学部
FD委員会

FD委員長: 安元隆子

FDニュース小委員会:

長嶺宏作・鄭勳燮

白瀬朋仙・太田尚子

2011年12月22日発行